

# 軍事的施設か、疑問残る

佐川 正敏氏

宮城学院女子大学の平聡先生は、原添下区域の建物跡と前九年合戦絵詞との比較など、長らく発掘調査の指導委員の段階からずっと現場を見てきた。専門は日本古代史

だが、文献資料や絵画資料、考古資料を突き合わせた形のお話になると思う。

大平 聡氏

とがあり、その時にわか勉強で戦闘と施設を考えた。戦いがどのように行われたかを考えたが、「よく分からない」ということが分かった。堀を見るとすぐ防衛施設と言ってしまう、北東



鳥海柵跡を文献から考察した宮城学院女子大学教授の大平聡氏

北の堀を巡らせた集落は防衛性集落としてしまが嫌い、柳之御所の堀のことも、すぐ軍事的施設と考えてはいけなではないかと、常々考えてきた。

柳之御所遺跡の時は、絵巻を便利だと思ったが、どうも絵巻の絵が描かれた時期と、事件のあった時期に開きがあり、簡単に応用してはいけなではないかと、怖くなった。一番可能性が高くて、実録性があるのは陸奥話だろう。いろいろなバイアスが掛かっている(先入観にとらわれている)とは思いますが、現地の報告に基づき書かれていたらどうかと考え、意識的に絵巻を外して検討してきた。

陸奥話記と奥州後三年記という文献資料から考えた。奥州後三年記でも陸奥話記でも、「たて」という言葉が盛んに出てくる。「たて」というと、「館」という字を書いて「たて」だが、どうも安倍・清原の施設を「柵」という字や「楯」という字で表すことが多い。遮蔽施設が大きな特徴になっていたのだからと思った。しかし、それが軍事施設かというところよく分からない。戦争が始まった時に、一定の役割を果たしたことは間違いないだろう。そういう目で発掘調査の結果を見ると、確かに自

然の沢を利用し、いかにも防衛施設そのものという感じがする。研究者の中にも、非常に防御性が高いとする方もいる。が、例えば今回の話題の中心である原添下区域の南東部の部分は、本当に戦闘向きに見えるかというところ、「うん」とは言えない。縁から遮蔽施設、柵列が出てくることを期待していたが、それも無い。鳥海柵で、私が一番軍事的な施設のように印象で感じているのは、二ノ宮後区域の島状台地と言われているところ。ここはなんとなく軍事施設的に見えるが、そのほかの区域は正直、沢以外にどう軍事的施設とみてよいか分らない。(つづく)

金ヶ崎の国指定史跡 鳥海柵跡

16

## 考察 全盛期の中心的建物

2017年度シンポジウムより

### パネル討論要旨 VIII

#### 登壇者

コーディネーター

佐川正敏氏

(東北学院大学教授)

千田嘉博氏

(奈良大学教授)

本堂寿一氏

(国史跡鳥海柵跡整備委員会委員長)

大平 聡氏

(宮城学院女子大学教授)

相原康二氏

(えさし郷土文化館長)

高橋 学氏

(秋田県埋蔵文化財センター副所長)

箱崎和久氏

(奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長)